第９分科会（公開保育：かもめ幼稚園）

意欲・自己調整力・創造力の育成をめざして　～砂場での遊びを通して～

同志社女子大学教授　　笠間　浩幸　先生

１．　ワークショップ

２．　研究討議

「砂場遊びにおける内面の育ち step1～step5」について説明します。

Step1

泣いていた子どもたちも先生と一緒に砂場へ出掛け、先生の近くで砂遊びをしているうちに気がつくと涙は止まり、さらさらの砂に興味を持ち始めています。子どもの心情・意欲・態度や発達の特性を捉えながら子どものありのままの姿を受け入れることが Step1 の人や物との出会いや安心感、そして心の安定に繋がると考えます。

Step2

保育者とのかかわりの中で気持ちが安定してきた子どもたちは、次第に周囲に目を向けるようになります。他児がしている遊びに興味を持ち始め、傍で見たり、友だちの存在に気づき同じ遊びを真似してやってみようとしたりします。

これは、手が汚れる事に抵抗があった Y 児を捉えた写真です。仲よくなった友だちがしている遊びに興味を持ち、最初はじっと見つめていましたが、次第に真似をして触ってみたくなり近くにあった葉の茎で間接的に触っているところです。その後、友だちが泥団子作りを始めるとその様子をじっと見ていた Y 児に保育者が「Y ちゃんもやってみる？」と尋ねると、「うん！」と答え、泥団子作りに挑戦しました。保育者が泥のかたまりを Y 児の手のひらに落とすと、始めは恐る恐る触っていましたが、握ると団子に近い形に変化したことを喜び、次第に手のひらが黒くなるほど触って楽しんでいました。まだ団子の形にはなっていませんでしたが、Y 児は達成感を感じている様子でした。

このころの育ちを支えるために、一人ひとりの子どもの内面の動きを読み取りながら、興味や関心を持って友だちや異年齢の関わりへと繋げていくことが Step2 の好奇心や見る力、そしてスコップで砂をすくったり手で泥を丸めたりするために必要な操作性の獲得に繋がると考えます。

Step3

クラスの友だちや年上児が泥だんご作りをしている姿を見て見よう見まねで土に水をかけて丸めたり、さら粉をかけたりしています。真似から始めた遊びの中で水の量や丸める時の力加減など自分の中で試行錯誤を繰り返しながら砂や水の性質に気づいていきます。このころの育ちを支えるために、子どもの気づきや発見などを認

め、できた時の感動に共感することや周囲の子どもにもその感動を伝え、共有していくこと、そして子どもたちが安心してイメージを表現できる「雰囲気や場そして時間」を確保していくことが Step３の繰り返しやってみようとする力や考える力、そして友だちに自分の考えを発信する力に繋がると考えます。

Step４

砂の城を作ろうと二人で力を合わせていますが、バケツを取ったらすぐに崩れてしまいました。その後も何度も何度も挑戦していました。

このころの育ちを支えるために、子ども達の試行錯誤や工夫を促すように、気づきを持たせる言葉がけをしたり、葛藤・つまずき・挫折感等の感情を受け入れ、再度試みたりできるように「遊びの援助者」「共同作業者」になることが Step４の探求心や創造する力、そして社会性の育ちに繋がると考えます。

Step5

ぎっこんポンプにビニールパイプを差し、パイプの先を高い位置で止めたいという思いから、年中児と年長児は長くて固定できるものを探していました。

その時、年長児がスコップを立てて使うことを思いつき早速試してみました。スコップを砂に直接差すと水で砂が崩れてスコップは倒れてしまいました。スコップを立てるためにはどうしたらいいのか友だちと話し合いは続きました。また、パイプの先にさらに“雨樋を置きたい”という思いも出てきました。子どもたちは今までの経験から「バケツに砂を入れスコップを差し固定させる」ことや「バケツとボールを伏せて使うこと」を思いつきました。試してみると水を流すことができ大成功でした。このころの育ちを支えるために、子ども同士が一緒に考えアイディアを出し合ったり試したり、感情体験を共有するなど友だちと関わる姿を見守っていくことが Step5 の「充実感や協同性そしてみんなでやり遂げた達成感に繋がると考えます。

日々、何気なく砂場で遊んでいるように見える姿でも、発達的視点を持つことによって、次の段階への見通しを持って援助を工夫できるようになりました。また、私たちは子ども一人ひとりの姿を年齢ではなく、興味や砂への関わり方、そして遊びの中の人間関係がどのような姿に向かっているのかを捉え、職員間で共有しています。

つづいて、砂場遊びの様子をより詳しく紹介します。

写真に写っているオレンジ帽子の子どもたちは、年少新入園児です。初めての集団生活の不安から、泣きながら登園してくる子も、担任と一緒に砂場へ行きお友達が持っているものと同じスコップを手にしたり、担任の側で砂を触ったりしているうちに涙も止まります。また、この時期には右端に写っているA児のように手や衣服が汚れること、はだしになることへの抵抗がある子もいます。この時期は友だち同士の会話はあまりありませんが、近くに友だちがいること、砂場という場に自分の居場所を見出し安心感を抱きます。

5月です。担任が誘わなくてもクラスの友だちと誘い合って砂場へ行く姿が見られるようになりました。

砂場遊びが大好きなB児がスコップを器用に使いこなし川づくりをしています。その様子に興味を持ち側でじっと見ている子もいますが積極的に関わっていく子ばかりではありません。

7月、プール、水遊びの時期になり砂場での遊びも大胆になってきました。　先ほど登場した川づくり名人のB児を中心に水族館ごっこが始まりました。言葉でのやり取りが少なかったほかの子どもたちも“水族館”というみんながイメージしやすい設定であることで「僕が水を運ぶ！」「ここからお水をつなげよう！」と遊びを通して子ども同士のやりとりが増えてきました。裸足になることへ抵抗があったA児も少しずつ砂の感触に慣れてきました。

積極的に関わる姿はありませんが、スコップを片手に持ち“水族館ごっこ”の様子を眺めています。

そして夏休み明けの初日、“水族館ごっこ”を覚えていたB児が砂場へ飛び出し遊んでいると、A児がそこへ参加し始めました。A児は夏休み中に家族旅行で水族館へ行ったようで、その思い出を得意げに話していました。経験したことが遊びへつながる場面でした。

そしてこの“水族館ごっこ”はしばらく続きました。

時には“魚釣り”と“水族館”…魚を捕る捕らない互いの意見がすれ違い言い合いになることもありましたが、自分の意見を伝えたいと必死になる姿は他の遊びではなかなか見られない姿だな、と感じました。

続いて、昨年の年長組秋の遊びの様子を紹介します。

子どもの影になって分かりにくいですが、これはかもめ温泉です！

この日の前日まで数日雨が降り続いていました。砂地が雨を含むと底から雨水がにじみ次第に溜まっていきます。そのことを知っている子どもたちは「今日は温泉が掘れるぞ！」と砂場に飛び出して行きました。知っている事象を確かめたい、実験的な遊びです。

深い穴を掘ると更にまわりが水分で崩れ、どんどん穴が大きくなります

大きな穴をつなげ、溜まった雨水で水路を作る遊びへと発展していきました。

子供たちはこれまでの経験から雨天が続く数日の間、雨のあとの砂場の様子を想像し期待を膨らませていました。

長い時間の経過を遊びに生かし、また知識や事象、そして砂、泥、水の感触を確かめ友達と共有することで同じ場で遊ぶ仲間との一体感も味わっています。

「温泉掘り」の遊びの後、砂場には沢山の大きな穴が残りました。「ここは私の部屋にしよう」水路を廊下に見立て、「私のお部屋につながってるよ」とそれぞれの穴を部屋に見立て遊びが広がり高低差を利用して階段やお風呂場も作られ砂場の中の広い一角が大きな家となっていきました。広い場をとらえ共有しながら遊びが進められました。

台所の場所が決まり砂に冷蔵庫、ガスレンジを描き、ごはん作りが始まり出来上がったおかずは冷蔵庫に運ばれ、時には他の集団で遊ぶ保育者や友達へも運ばれ、イメージはそれぞれの小集団を繋ぎました。

ごちそう作りの中では型抜きをしたものを規則的に並べ大きなものに見立てたり、砂の質感によってカステラ、クリーム、板チョコ、など使い分ける様子もあります。園庭内で調達できる素材を生かしたり、平面の造形、立体の造形を組み合わせることもありました。

始まりは個々が事象を確かめ楽しんだ遊びでしたがこの広い空間の場を共有しているのは年長児ならではの広い視野があるからこそ想像力豊かに遊びが展開されていったと考えられます。

遠くの集団と思いを伝えあい言葉によってイメージや見立てを伝え、更に共有を深めている様子からは、経験や知識、語彙の豊かさが遊びの中に生かされています。

このように一つの遊びに時間をかけ、友だちと協力し、充実感を得ることが出来るのは、これまでこの砂場でこころとからだを動かし学んできたからこそです。

今回、このような研究の場をあたえていただいたことで改めて、砂場遊びを見る視点、子どもの遊びをどう捉えどのように援助していくのか、より具体的に職員間で共有することができました。

砂場での育ち

こころが動く　自ら伸びる　学びの根っこ

↓　↓

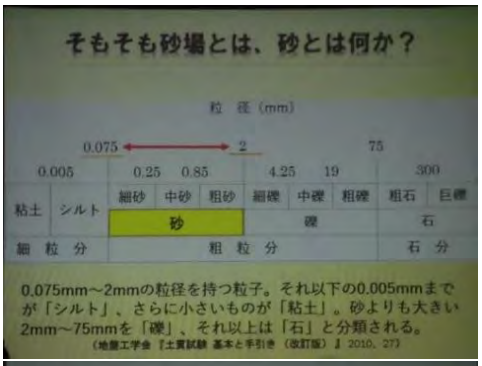
小学校以降の「学びへ向かう力」

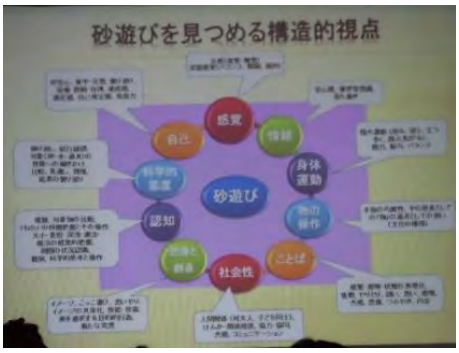
主体的　**対話的**　な学び

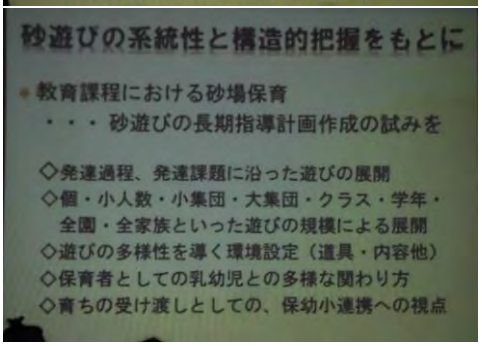
そして、砂場での育ちが小学校における主体的な学びの基礎となり、友だちや保育者との温かい関係の中で育まれた協同性やコミュニケーション力等は対話的な学びにつながると考えます。また、今回、笠間先生の指導のもとで今まであった砂と砂質の違う砂を置き、サラサラの砂を取り入れた事でアート的な遊びも広がってきています。今まで以上に砂場遊びに達成感、充実感を持てることを期待しています。

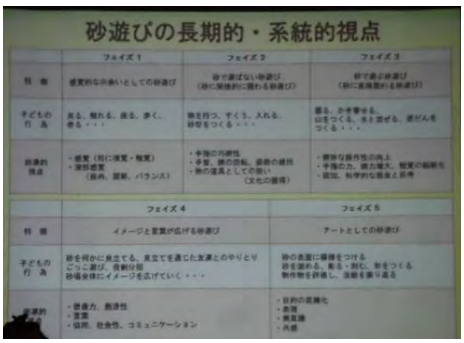
３．　指導助言

同志社女子大学現代社会学部現代子ども学科教授、笠間浩幸先生に・砂場に潜む子どもの発達的要素・砂遊びの発達的展開などについてお話をしていただきました。









４．おわりに

砂遊びという、ごく普通の遊びにも、子どもたちの発育発達の可能性は、たくさん詰まっている。遊びが身近であればあるほど、子どもにとっては日常的にその可能性を享受することが可能となる。しかも、それが子どもの楽しみと喜びを増大させるものであるなら、これ以上の効果的な保育・教育・子育て環境はない。今、改めてこのような身近な遊びに目を向け、その必要性と重要性を理解し、子どもの遊びを保証することが求められる。